

第16回

第2章 人間としての自覚—哲学・宗教・芸術

芸術と人間 ～思いを形に～

今回学ぶこと

芸術は哲学や思想とも深くかかわりを持っている。芸術は感覚的な楽しみにとどまることなく、相互に感情を伝えあう共感やコミュニケーションの楽しみをもたらす。さらに、自己の存在を確かめあう、生きるための表現でもある。人々の世界観を変え、世界を動かす力にもなる。テクノロジーにより現代ではだれもが芸術を身近に楽しめるようになったが、知的所有権への配慮も必要である。



講師

和田倫明

■ 美を感じる心 ■

孔子が「礼楽」すなわち礼と並んで音楽を大切にしたように、哲学・思想は実は芸術とのかかわりを持っている。キリスト教と教会音楽、ピタゴラスの音楽、ヘレニズム文化と仏像など、多くのかかわりがある。

芸術は自ら創造することによって、感覚の楽しみ、つまり生物個体としての身体的な楽しみをもたらすが、それにとどまらず感情を伝えあったり共有したりする、共感する楽しみ、コミュニケーションの楽しみもまたもたらす。

美が善と同様の意味でもちいられるのも、それが人間らしいコミュニケーションにかかわるからでもある。

■ 芸術作品の持つ力 ■

芸術は楽しみにとどまらず、慰めや励ましを与える。第二次世界大戦中、収容所生活を強いられたアメリカの日系人が、生活の中で作っていた身の回りの品物を集めた『尊厳の芸術』は、追いつめられた厳しい現実の中であって、ものを作るということが、単に必要だからというだけではなく、自らの存在を確かめ、自らを表現するための、大切な行いであることがわかる。単なる気晴らしを超えた、生きるための表現である。

さらに、優れた芸術家の自己表現は、それを享受するものの世界観を変える。たとえば「ひまわり」という言葉は、向日葵が描かれた絵画や、読みこまれた短歌や、タイトルとなった映画などの芸術を享受することで、言葉の厚みを増していく。

さらにピカソの絵画『ゲルニカ』をはじめとして、芸術は世論を動かし、世界そのものを変える力も持つ。

■ ■ 現代社会と芸術 ■ ■

テクノロジーの発達は、芸術の楽しみを身近なものにした。たとえば携帯電話のカメラの高機能化は、手軽に写真を撮るだけでなく、それを加工すること、さらにはメールやブログなどに公開して、気軽なコミュニケーションの道具として使うことを可能にした。パソコンでオーケストラやボーカルを演出することも可能になった。今や、誰もが芸術の発信者になれる時代である。

しかし一方で、データの複製や流通が容易になったので、知的所有権の侵害に注意しなければならない。

◆ コラム ◆

「芸術は長く、人生は短い」という言葉がある。英語の“Art is long, life is short.”の訳で、文字通りの意味、つまり芸術の永続性を表すようにとらえられることが多いが、もともとは古代ギリシアの医学者ヒポクラテスの言葉で、しかももっと長い。訳せば「人生は短く、^{ぎげい}技芸は長く、時間は素速く、経験は危うく、判断は難しい」というような意味になる。art はラテン語でars、ギリシア語でtechneで、いわゆる芸術ではなく、医術を含む人の手によるもの全般を指している。ヒポクラテスは医術を身に付けて確かなものにしていくことがいかに難しいかを述べたのである。これが、ローマ時代にセネカが『人生の短さについて』でラテン語“Vita brevis, ars longa”と引用したところから、広まったものと思われる。